

『すべてあなたの思うまま』

ヴィスクから逃げて、グロウから逃げて、またヴィスクのところに戻ってきた私は、もしかしたら尻軽なのかもしれない。

私の体に刻まれたグロウの支配の痕跡は、日を追うごとに少しづつ薄くなつていった。あの日以来、私を抱いたヴィスクは、あらためて私と約束をした。

私の体の痣がすべてきれいに消えるまで、私に手は出さないと。

「もうしちやつたのに？」

今更じやないのかな、と私が文句を言うと、ヴィスクは困つたように笑つて私に温かいお茶を入れてくれた。

あれから二週間、ヴィスクは本当に、ちつとも私に触れてこない。

キスくらいしてくれてもいいんじやないかとねだつても、甘いお菓子を与えられて追い返されてしまう。

ヴィスクは本当は、私と恋人になんかなりたくなかったんじやないのかな？

二十五年も私に縛られて、執着してゐるような氣がしてたけど、一度私と離れてみたら、ようやく解放されてせいせいしてたんじやないのかな？

なのに私が帰つてきて、ヴィスクは優しいから突き放すこともできなくて、それで私は押されて一回やつちやつたし、ますます捨てにくくなつちやつたとかじやないのかな？

ぐるぐる、ぐるぐる。

悪い考えばかりが次々と浮かんでくる。

グロウといふときは、こんな気持ちにならなかつたのになあ。

私はいつでもグロウの命令があつて、それに従つてない時間は少しもなかつた。

こうして「好きに過ごしてください」と放置されると、支配されてる毎日がどれだけ

楽だつたかを思い知る。

ヴィスクの家は、あまり治安が良くない地域にある。

どうして？ つて聞いたら、苦しむ子供の逃げ場所になれるようつて。

ヴィスクは本当に先生だ。

誰にでも優しい。

そして私は、そんなヴィスクの家から孤児院の部屋に戻ってしまった。

私はヴィスクの家でよかつたけど、ヴィスクは「僕がいない間、危ないから」つて。

つまり私は孤児院で寝泊まりして、ヴィスクは自宅に帰つていく。

「避けられてるみたい……」

夕方。

私は孤児院の中庭で、ホウキで枯草なんかを集めながら、ぼんやりと夕陽を見上げた。

「避けてませんよ」

そんな私の横にヴィスクが立つ。

私が見上げると、ヴィスクはいつもの、困ったような笑顔だ。

「でも……」

私はホウキを握つてうつむいた。

ヴィスクの笑顔が、あんまり真っすぐ見られない。

「二人きりになろうとしないよね」

「なつてますよ。こうして」

「人目がある場所とか、外でとか、そういう場所ではなつてくれるけど」

「それじや不満ですか？」

「私、ヴィスクを襲つたりしないのに」

「本当に？ よく思い出した方がいい」

「襲つたかも……」

からかうように言われて、私はますます小さくなる。

「やつぱり、嫌だつたよね……」

「あの時、僕は嫌がつてるように見えましたか？」

「み、見えなかつたけど……後になつて後悔するなんて、よくある話だし」

「君こそ、後悔してるんじゃないですか？」

「え？」

「僕をよく見て、オーリー」

私はじつとヴィスクを見た。

「……見たけど？」

「感想は？」

「ヴィスクだなつて」

「それじやあ、窓に映る僕たちを見ましょうか」
ヴィスクに促されて、孤児院の窓を見た。

「何か言いたいことは？」

「あ、髪の毛くしやくしや……」

私はいそいそと髪を整えた。

「ちよつと風が強くて……」

「わからないふりをしてるんですか？」

「まだ何かおかしい？」

「僕は三十九歳だ」

きよとんとしてしまう。

「それは……年が離れすぎてるから……私が後悔してるんじゃないのか？　つて」と？」

「そうですね」

「私がもつと、若い男と付き合いたいんじゃないかつて？」

「そう思う方が自然だ」

「じゃあ、ヴィスクは？」

「僕？」

「私が十七歳だから抱いたの？」

ヴィスクの表情がひきつった。

吐き気をこらえるような渋面を浮かべて、さつと私から目をそらす。

「ひどい質問ですね」

「ヴィスクも同じくらいひどいこと聞いたよ」

「それは……」

言い訳しようとして、ヴィスクは黙った。

二人並んで、私たちは夕陽を眺める。

「痣は、薄くなりましたか？」

「うん。もうほとんどない」

「手を握つてもいい？」

私は答えずに、ヴィスクの小指に小指を絡めた。

ヴィスクはそんな私の手をぐいと引っ張つて、ズボンのポケットに引っ張り込む。

びっくりして見上げると、ヴィスクはにっこり笑つて、

「僕はこれくらいしつかり握りたい」

なんて言つて私は真っ赤にさせた。

「こ、孤児院の職員さんに見られちやうよ……！」

「僕はかまわない」

「でも……」

「君が僕を選んでくれるなら、誰に見られてもいい。何を言われてもいい。君とこうして手をつなげること以上に、僕が望むことは何もない。ここで君にキスをしたつていい」「そ、それは……！」

さすがにダメだよ、と言おうとした私の唇に、ヴィスクの唇がそつと触れた。舌の絡まない、優しいキスだ。

それだけでどうしようもなく泣きそうになつて、私はポケットのなかでヴィスクの手を強く握り返す。

「言つたでしよう？　僕は重いつて」

「い、言われた……」

「君はあの時混乱していた。そのまま僕につかまってしまったら、あまりにも不公平だ。
だから、逃げる時間を作ったんです」

「そんなの要らなかつた……！」

「不安にさせましたか？」

「させた」

「どうお詫びをしたらいい？」

「そんなの、ヴィスクが考えて……！」

泣きそうになりながら、ほんんどどなるように言つた私の唇の端に、ヴィスクはまた
触れ合うようなキスをする。

「このあと二人で、部屋を探しに行きましょうか。僕と君が、一人で住むための部屋」
「でも、ヴィスクの家は？」

「別の職員に格安で譲ろうかと。なんとなく、もう話はついてるんですよ。僕もそれほど若くはないから、治安の悪い地域に住み続けるのはやめてくれと言われてるんですけど」

そつか。たとえば十五年前なら、ヴィスクは二十四歳だったわけで、若々しくて背の高かつたころのヴィスクは、治安の悪い地域でも平気で生活できたんだ。

私から見れば、今のヴィスクも十分強そうに見えるけど……。

ん……？

待てよ？

「話がついてるっていうのは……つまりその……ヴィスクが一人暮らしする……って思つてる感じ？」

「いえ、結婚を視野に入れてる女性がいるのでという話を」

「……私のこと？」

「そうですね」

「もし私がヴィスクの言う通り逃げ出してたら、どうする気だつたの？」

「僕は重いと言つたでしよう？」

全然答えになつてないけど、につこりとほほ笑むヴィスクの、晴れやかな笑顔が逆に怖い。

怖い。

怖くて、ぞくぞくして、うれしくなる。

わたしは試しに、ぎゅっとヴィスクに抱き着いてみた。
ヴィスクはこんなに私が好きなんだつて実感できて、さつきまで不安でぐるぐるしてた心が穏やかになる。

わたしは試しに、ぎゅっとヴィスクに抱き返してくれる。
ヴィスクは躊躇なく抱き返してくれる。

温かい。

力強い。

私は幸せだった。

本当に、本当に幸せだった。

それなのに、どうして。

——どうして？

2

私は路地裏に立っていた。

背中は壁に押し付けられていて、目の前にはグロウがいる。優しい笑顔だった。

だけど、どうしようもなく怖くて、私がガクガクと震えだす。

「あ、う……あ……」

叫びたいけど、声が出なかつた。

私のそんな無様な姿に、グロウはますます笑みを深くする。

そして、そのまま私に口づけた。

私の喉の奥まで、グロウの分厚い舌が押し込まれて、息が苦しくて私はもがく。

でも、少しも動くことができなかつた。

瞼からボロボロ涙があふれて、垂れたよだれが服を汚す。

氣を失う寸前に、ようやく呼吸を許されて、私はぜえぜえと喘いだ。

グロウは何も言わない。

何も言わずに、私の首筋に唇を這わせる。

そのまま、ガリリと強くかみついた。

「いつ……！ やだ、痛い……！」

焼けるような痛みに、私は泣きながら必死にもがく。首に、ぬるりとした感触があつた。

むつとする鎧のにおい。

わたしの血のにおい。

「どれくらいで消えるだろうな。この、噛み痕は」

耳元で、グロウが低く、甘く、優しくささやいた。

鼓膜をくすぐる吐息の熱さと、首筋の痺れる痛み。

「どうして……ッ……！」

私は体をよじりながら、絞り出すように問いかけた。

「あなたは私のものだと刻み付けるためだ」

「私、もう……グロウのものじやない……！」

「本当に、そう言えるか？」

足の間にグロウの膝が入り込んできて、私は「ああ」と声を上げる。

ぐちゅりと、ねばりつく水音がした。

喉の奥を震わせるような、グロウの低い含み笑いが、私を辱めていく。

「服を脱げ」

「嫌……！」

「では破こう。そして全裸で路地裏を出ていくあなたを見送ろう。奇異の目にさらされ、哀れまれ、ヴィスクが慌てふためいて駆けつけてくるのを見ていてやる。あなたがそれを望むのなら」

「そんなの……！」

「もう一度、選択の機会をやろう。選ぶのはあなただ。服を脱げ」

逆らえなくて、私はブラウスのボタンをはずした。

言う通りにしたのに、グロウはブラウスの下に着ていたものを、全部乱暴に引きちぎつて、私の胸にまた噛みつく。

「痛い……！ やだ、痛い、痛い……！」

大通りの人たちに聞こえないように、必死に声を殺して泣く私を無視して、グロウはつうと流れる血をすすり上げた。

スカートをたくし上げられ、下着もむしり取られる。

「なんで……やだ……返して……！」

「あなたには必要ないだろう」

私があふれさせたものでぐしゃぐしゃに濡れた下着を私に見せつけて、グロウはそれを地面に捨てて踏みつけた。

そして、ひざまずく。

グロウが私のスカートの中に入つてきて、あふれて滴る愛液をすすり上げた。

「ひ、い……！ や……やめて、やめて、やめて……！」

舌が、私の一番敏感なところを、ぐりぐりと責め立てて、太い指が何本も、私の奥までかき混ぜて、頭がチカチカして、何も考えられなくなる。

ぐしゃぐしゃに泣きながら、私は薄暗い路地裏に差し込む大通りの光を見た。時折、人が立ち止まつてこちらを見るのは、私を見るんだろうか？

それとも、路地裏の見えない闇に、なんとなく目を向けてるだけなんだろうか？ 声を、おさえなくちや。

聞かれたら変に思われる。

変に思われたら見られてしまう。

「あつ……！ ああ、や……！」

唇をかみしめた私の中を、グロウが一層激しくかき回した。

限界まで敏感になつた快楽の中心に、グロウの唇が吸い付いて、グロウの口の中でめちゃくちゃになぶられる。

「あ、ひ……ああ……！ や、や、それ……あ、だめ……まつ……い、っちや……も、いっちやう……いく、いつ……ぐうう……！」

びくびくと腰が震えて、立っていられなくなつた私の腰を、グロウは下から支えるようにして執拗になぶり続ける。

グロウは私の内ももに噛みついて、そのまま二つ、三つとキスマークを散らして立ち上がつた——私を抱え上げながら。

背中に、壁の硬さを感じた。

私の両脚はグロウに抱え上げられて、お互いの腰はピタリと密着している。

グロウが少し力を抜けば、地面に足のついていない私の体はずり落ちて、なすすべもなくグロウに腹の奥まで貫かれる。

「い、いや……」

私はグロウの肩に手を当て、押し返し、体をよじつて逃れようともがいた。

けどグロウの力は少しも緩まなくて、私は泣きながらグロウの肩を必死に叩く。

「おろして、お願ひ……！」

「おろしていいのか？ 本当に？」

少し、グロウが腕の力を抜いた。

たちまち私の体はずり落ちて、硬く張り詰めたものが、無防備に開かれた私に触れる。けど、布の感触だった。

グロウはズボンをおろしてない。

くつくと、グロウが喉の奥で笑つた。

「期待させてしまったかな？」

「期待なんて、してな……ひううつ……！」

ほつとした私の一番弱いところを、ざらりとした布の感触がこすり上げ、不意打ちで与えられた快楽に私は鳴いた。

二度、三度と腰をゆすり上げられ、私は耐えきれずにグロウの首にしがみつく。どうにか快楽から逃げたくて、腰を逃がそうともがいても、壁に押さえつけられた私にはどうすることもできなかつた。

「や、だ……！ 腰、とめて……やだ、それ……や、やあ……！」

「ああ、まつたく……なんて声を出すんだ、あなたは。逃げ出した男に与えられる快樂に、少しもあらがうことができないなんて」

耳をなめるような、グロウの声が、私の鼓膜を吐息でくすぐる。

声を上げるのが嫌で、私はグロウの肩に噛みついた。

ふ、ふと浅く呼吸を繰り返して、無様に果てた私の体がビクビクと跳ねると、グロウは愛しげに私の耳に口づける。

「オーリ、どうか……そんなに物欲しそうな顔をしないでくれ。この先は、あなたが選んだヴィスクにねだるといい」

グロウが私の体を地面におろすと、私はへたへたとその場に座り込んだ。

このまま路地裏で犯されることを半ば覚悟していた私は、思いもよらなかつた言葉にぽかんとして、間抜けにグロウに聞き返した。

「……逃がして、くれるの……？」

「もちろんだ。——だが、私があなたにつけたその傷を見て、ヴィスクはどう言うだろうな？　あなたをいたわり、ねぎらってくれるだろうか？　それとも、あなたの無警戒さを責めるだろうか？」

はつとして、私は首筋を押された。

それに、胸と、太ももの内側——血が出るほど強く噛まれた。体を見せたら、ヴィスクは絶対に何があつたか察してしまう。

「あなたのことだ、きっとやつに知られまいと、傷を隠し続けるのだろうな。肌の見えない服を着て、『そろそろいいか』とあなたを摘み取ろうとするあの男を拒絶して。あの男は戸惑い、途方に暮れ、なぜ突然拒絶するのか説明してくれと、あなたに懇願するだろう。あなたはそれにどう答える？」

どうしよう。

涙があふれて、ぱたぱたと地面に滴った。

とにかく体を隠したくて、ブラウスのボタンを留める。

けど、下着を奪われた私の体に、ブラウスがぴたりと張り付いて、血とグロウの唾液で濡れた体の線が隠しようもなく浮かび上がる。

「どうして……？　どうしてこんなことするの……！」　逃げていって言つたのに！

私が自由に選んでいいって、そう言つたのに……！」

「そうだ。だが選択には結果がともなう」

「こんなの、違う……こんな結果……！」

私が責めるように睨みつけると、グロウは物を知らない子供を見るような眼で私を見下ろした。

「では、どのような結果が待つていると？　あなたは私に蹂躪された体で、一度捨てたヴィスクの元に戻つた。ヴィスクが本当に、無条件にあなたを受け入れたと思つているのか？　あなたに捨てられたことを、少しも気にしていないと？　私に支配された日々で、あなたに刻みこまれた私の影に、あの神経質な男が気づかないとも？」

「そ、れは……でも……ヴィスクは、私のこと……大事に……」

「そうだろうとも、そうするしかない。だから私はあなたを逃がしたんだ」

「な、に……？　どういう意味……？」

「あなたの存在が、あの男を苦しめる。私はそれに手を貸そう。あなたがそう決めたのだから。あの男のところに行き、少女のように泣くといい。嫌だと言つたのにグロウに無理やりされたのだと。——想像するだけでうずいてくるだろう？　あの男が自分の無

力さを呪い、吐き気をこらえてひきつる顔を想像すると。あなたは自覚すべきだ。自身の残酷さに」

グロウの声は呪いみたいに、私の耳たぶを張って鼓膜に入り込み、脳みそにじわじわとしみこんでいく。

グロウは私に一番甘いキスを残して、路地裏から出て行った。

取り残された私は路地裏から動けなくて、夜がくるまでじつとそこでうずくまつていた。

私のブラウスは血まみれで、下着もなくて、明るいところで見たら絶対に何かあつたと気づかれてしまう。

「部屋を探す……ヴィスクと……二人でいる……ずっと二人で……」

そうすれば、大丈夫だ。

ああ、でもヴィスクには仕事がある。私は日中一人きりだ。

そしたら、グロウが家に来るかもしれない。

そしてまた、私に所有の証を刻みに来るかも。

そのたびに、私はヴィスクを拒絶するんだろうか。所有の証が消えるまで。

ヴィスクはそれを許してくれる?

きつと許してくれる。そういう人だ。

私が「したくない」と言えば、ヴィスクは全然平気そうな顔をして我慢してくれる。でも、本当は平気なわけじゃない。

わかつて、本当は。

わかつてた、ずっと前から。

グロウに調教された私を見て、ヴィスクがどれだけ傷ついたかわかつてた。

戻るべきじやなかつたんだ。

逃げるべきじやなかつた。

でも、だからってまたヴィスクのところから逃げ出すの?

そんなことできるはずがない。

「隠さなきや……全部……」

完全に暗くなるのを待つて、私はそっと路地裏から出た。

胸の前で腕を組んで、スカートのすそを気にしながら、みじめな思いを抱きしめて孤児院の部屋を目指す。

誰にも会いませんようにと祈つて部屋に駆け込んで、すぐに着替えを探した。その時――。

「オーリ。帰ってきたんですか？ こんなに遅くまで、どこに――」

「入つてこないで！」

軽いノックと同時に、ヴィスクが部屋に入つてこようとする気配に、私は悲鳴みたいな声を上げた。

ぎくりとしてヴィスクが動きを止めると、慌ててドアに駆け寄つてぴたりとドアを閉める。

「い、今、着替えて裸なの……！ いつも思つてたけど、ノックしても返事があるまで開けないで！」

「す、すみません……年頃の女性に、無作法でしたね」

ヴィスクの困ったような照れ笑いが、ドアの向こうから聞こえてくる。

温かくて、優しい声。

「ドア越しでいいので、少し、話をしてもいいですか？ 本当に心配したんです。日が暮れる前に帰つてくる予定だつたのに、もう子供たちは寝てる時間だ」

「ヴィスクも、家に帰つてる時間じやない？」

「待つてたんですよ。君が心配だから。——オーリ、何かあつたんですか？」

「何もないよ。大丈夫」

ヴィスクは深くため息をついた。

「……オーリ、僕は孤児院の院長だ」

「……だから？」

「隠し事をしている人間の態度はわかります。君はひどく怯え、傷ついてる。どうか、抱きしめさせてください。そして僕に話を聞かせて。きっと力になりますから」

傷が、ずきずきと痛い。

言うべき言葉が次々に頭に浮かんでくるのに、脳みそにしみこんだグロウの呪文がその全部を封じてしまう。

言葉は涙になつてすべてこぼれていつてしまつた。

私に残された言葉は、本当に少しだけだ。

「一人にさせて。お願い」

「オーリ……」

「お願ひします……院長先生……」

ドアの向こうで、ヴィスクがはつと息をのんだ。

数歩下がる足音。

「……明日、また話しましよう。でも、今夜は孤児院に泊まります。君が寂しくなつたり、やっぱり何か話したくなつたとき、すぐに僕のところに来られるように」

声を殺して泣き崩れる私を置いて、ヴィスクの足音が去つていく。

「ごめんなさい……」

私はささやいた。

逃げ出してごめんなさい。

戻つてきてごめんなさい。

傷つけてごめんなさい。

拒絕してごめんなさい。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい——」。

3

あのまま床の上で眠っていたことに、目が覚めて気が付いた。
窓の外はまだ夜だ。

体が冷え切って、ぶるりと震える。

お湯で体を洗いたくて、私は部屋着に着替えて台所に向かった。
熱いお湯を桶に張って、その場で体のあちこちをぬぐう。
手拭いを見ると、乾いた血の塊で汚れていた。

そういえば、一度も鏡を見ていない。

私はグロウの噛みあとを撫でた。

「どうしよう……普通の服じや隠れない……」

かなりきつちりとした詰襟の服じやないと……それか、ずっとスカーフを巻いてると
か。

ナイフで切ったと言い訳をして、ずっとガーゼをしておこうかな?

その方がいいかも……。

でも、ヴィスクが「ガーゼをかえてあげます」とか言い出したら?

「オーリ?」

「ひつ……！」

「すみません。物音がしたので」
ランタンの明かりをかざして、ヴィスクが台所の入り口に立っていた。

ああ——起きてたんだ。

私が夜中に、ヴィスクに話しに行くかもしれないと思つて、ずっと起きててくれたんだ。

——寝てくれればよかつたのに。

そんな風に思つてしまふ自分が嫌で、胃がぐるぐるして、吐きそうになる。

「寝汗かいちゃつて……体、ふいてたの」

「そう……手伝つてほしくはなさそうですね」

苦しそうな自嘲が、ランプに照らされて私を責めた。

早く出て行つてほしいと願いながら私が黙つていると、あろうことか、ヴィスクは台所に入つてくる。

過呼吸になりそうだつた。

ヴィスクのことが好き。本当に大好き。

だから、今は近づいてほしくなかつた。

叫び出したくなるほど、そばに来てほしくない。

だから私は、ヴィスクから逃げるよう部屋の隅に走った。

明確な拒絶の意思を、だけどヴィスクは無視して私に近づいてきた。

「来ないで……」

ヴィスクはランタンをテーブルに置いた。

私が左右のどちらに逃げても捕まえられるように、長い両腕を開いて近づいてくる。「来ないで、来ないで、来ないで……！」

泣きながら懇願する私を、ヴィスクはついに壁際に追い詰めた。

ヴィスクが壁に両手をつくと、私はヴィスクの腕の中に閉じ込められてしまう。

「ほら、捕まえた」

噛み痕を見られたくなくて、私は首に手を当て続けている。

ヴィスクはそんな私の手首をつかんだ。

「やめて……お願ひ……」

「怖がらないで。君は悪くない」

「どうしてそんなこと言えるの！ 何も知らないせに！」

「グロウが来たんでしょう？ わかりますよ。やつがやりそうなことだ」「え、と私が気を抜いたとたん、私の首筋はヴィスクに晒されていた。

この薄暗い台所で、傷跡はどれくらいよく見えるんだろう。

「傷、すごく痛みますか？」

私は首を左右に振った。

グロウは加減を心得てる。

じりじり、だらだらと続く、さいなむような痛みの与え方を知っている。
「おいで。手当をしましよう。化膿したら大変だ」

「でも……」

「やつが傷つけたなら、僕が治す。ね？ 僕がそうしたいんですけど」
ヴィスクに手を引かれて、私は薄暗い台所から、明かりのともつた職員の仮眠室へと移動した。

ヴィスクは棚から救急箱をおろすと、ベッドで私と向かい合う。

「ああ……かわいそうに。噛み傷が腫れてる……消毒をしますね。染みますよ？」

「ん……」

びりりとする痛みに、私は体をすくませる。

首の傷だけ……首の傷だけだ。

大丈夫、胸と太ももの傷はバレてない。

ヴィスクが私の首に薬を塗つて、ガーゼをあててくれるのを感じて、私はほっと息を

吐く。

「ありがとう。ちょっと楽になつた」

「——ほかには?」

「え?」

「オーリ。いい加減、僕を察しの悪い愚か者みたいに扱うのをやめてください。傷つきます」

「ゞ、ごめん……」

「それに、傷つけられた君を責めるようなクズ扱いすることも、傷ついた君を見て心を痛める弱い男扱いするのも禁止です」

「う、あ……うう……」

全部図星で、何も反論ができなくなってしまう。

もゞもゞ言うばかりの私の寝巻のボタンに、ヴィスクは淡々と手をかけた。

前を開けると、胸にも噛み痕がある。

ヴィスクはこれも消毒して、ガーゼを当てて、寝巻の前をしめてくれた。

そして、じつと私を見る。

まるで私を試すみたいに。

私はぎりぎりとベッドに乗りあがって、ヴィスクの前で脚を開いた。

ワンピースタイプの寝巻を太ももまでたくし上げると、グロウが残した痕がある。強靭な精神力で、ヴィスクは少しも表情を変えなかつた。

絶対に嫌なはずなのに。

腹が立つてのはずなのに。

「ごめんね、ヴィスク」

「謝らないでください」

「でも……」

「君は悪くない」

ヴィスクは私の内腿にもガーゼをはると、優しく微笑んで「はい、おしまい」と言った。

私は寝巻の裾をもとに戻して足を隠し、なんとなく居心地の悪さを感じてもぞもぞする。

「私……朝までここにいてもいい……?」

「いいですよ。大丈夫、僕が見張つてますから、怖い男はもう来ません」

「私、一人で出歩くの、やめるね」

「うん、しばらくはそれがいい。何か用事があるときは、孤児院の職員と一緒に出掛けるのがいいでしよう」

「早くヴィスクと二人で住みたいな」

「僕もその日が待ち遠しい」

「ヴィスク……」

「ん?」

抱いてほしい、と。喉まで出かけた言葉を、私は飲み込んだ。

また私は、ヴィイスクを利用しようとしている。

グロウから逃げ出して、怖くて、震えていたあの夜——恐怖をごまかすために、私はヴィイスクを利用した。

今もまた、グロウに食い散らかされた体の痛みをごまかすために、残飯のような自分をヴィイスクに処理させようとしている。

「オーリ……キスしてもいい?」

「え?」

私が答える前に、ヴィイスクは私の唇を奪った。

触れ合うだけのキスかと思つたら、舌が入り込んできて、私は夢中になつてこたえる。

嬉しくて涙があふれた。

グロウにめちゃくちやにされた私にも、ヴィイスクはこうして触ってくれる。

背中に腕を回すと、そのままベッドに押し倒されて、足を押し開かれた。

「ごめん……ごめんねヴィイスク、ごめん……ごめん……」

「しい……黙つて。子供たちに聞こえたたら大事です」

悪戯っぽく笑つて、ヴィイスクはまた唇で私の唇をふさぐ。

キスだけで簡単に濡れる私の卑しい体の奥に、ヴィイスクが気遣うように入つてきて、私はヴィイスクの腰に足を絡めた。

奥を突かれるたびに、ビクビクと腰が跳ねて、声が出そうになるのを必死にこらえる。

ヴィイスクの唇を噛みそうになつて、私は顔を背けて自分の唇を噛んだ。

けど、ヴィイスクはそれを許してくれない。

私が再びキスを受け入れるまで、何度も、何度も唇をついばんで、じらすように浅いところを行き来する。

耐えきれずに私が唇を開くと、すぐにまた舌が絡んだ。

そのままお腹の奥をえぐられて、私はヴィイスクのスーツに爪を立ててもがいた。

安物のベッドが、私とヴィイスクの代わりにうるさく軋んで、その音の大きさに怖くなる。

何度目かわからない絶頂が私の全身をひきつらせて、私と舌を絡めたまま、ヴィイスクが苦しげに呻いた。

じわりとした温かさがお腹の中に広がつて、私とヴィイスクは抱き合つたまま乱れた呼吸を整える。

ヴィイスクは私の肩に何度かキスしながら、クスクスと笑つた。

「まったく……いい歳をして、こんな、子供が隠れてするみたいに……」

「は、早くヴィイスクと二人で住みたい……」

私はぐつたりとなつて、さつきと同じことを、心からの実感を込めて言つた。
声を潜めてするのがこんなにつらいなんて、知らなかつた。

ヴィスクはそんな私の頬を指先でくすぐりながら、

「楽しんでもるよう見えましたよ？」

とからかうように言う。

私がヴィスクの顔を押し返してそっぽをむくと、また楽しそうな笑い声が静かに私の鼓膜を撫でた。

さつきまで私を絡めとつていた恐怖と罪悪感が、気が付けばもうない。

もしかしたら女は、こんな風に男の体に依存していくのかなど、不穏な考えが頭をよぎった。

これを言つたら、ヴィスクにまた叱られるんだろうけど……。

とにかく、私はまたヴィスクに救われてしまつた。

「ヴィスクは私に甘すぎると思う……」

ぱつりとつぶやき、ヴィスクに背を向けて横たわると、後ろから抱き寄せられてどきりとした。

「ねえ、オーリ。君を失う以上に辛い事なんて、僕には何もないんです。だから、僕を傷つけまいとして、僕から逃げたり隠れたりしないでください。誰かにつけられた傷は全部見せて。僕を傷つけたくなつたら傷つけて。利用したくなつたら利用して。君のそばにいるための苦痛なら、僕はすべてが愛しいんだ」

「……もしまだ、グロウが急にきて、私をめちゃくちゃにしても……？」

「そう。ほかのどんな男がやってきて、君をめちゃくちゃにして、君を汚い女だと思いい込ませても。僕は君の味方です。絶対に君を責めない」

「でも、時々はお仕置きしてほしいかも……」

ぽろりとこぼれた本音に、私はちらと、肩越しにヴィスクを見た。

ヴィスクはとけるような笑みで、私の耳を軽く噛む。

「考えておきますよ、じやあ。ほかの男にはできないようなお仕置きを」

う、うわあ……どうしよう、ドキドキしてきた。

本当に、すごいお仕置きされそう……グロウとは別の方向ですごそう……。

腰に回ってきたヴィスクの手をぎゅっと握つて、私は目を閉じて、自分の心臓の音を聞く。

首や、胸や、太ももにじりじりと停滞していた噛み痕の痛みは、いつの間にか感じなくなつていた。